

間違いだらけの生物多様性

「生物多様性」は取っ付きにくい。今年10月には、名古屋市でCBD・COP10（生物多様性条約第10回締結国会議）が開かれるというのに、まだまだ日本人に理解されているとは言えない。何が問題なのか。何が誤解されているのか。「生物多様性」におけるトップの専門家たちに話を聞いた。

- 1 **実はビジネスに直結していた。**
- 2 「種の保全」だけではなかった。
- 3 原材料には注意したほうが良い。
- 4 「生物多様性」は誤訳かもしれない。
- 5 木でも植えておくか、ではダメ。
- 6 まず「環境負荷」を減らす努力を。
- 7 生物多様性の復元にならない事例も。
- 8 深く考えないで宣伝してはいけない。
- 9 「びっくりドンキー」は先進的だ。
- 10 世界的にはユニリーバがリード。



パネリスト

足立直樹

株式会社レスボンズアビリティ代表取締役。東京大学理学部 同大学院で生態学を学び、理学博士号を取得。「企業による生物多様性の保全」などが専門。

栗野美佳子

WWFジャパン自然保護室生物多様性条約担当。早稲田大学大学院政治学研究所修士（国際政治専攻）。COP10に向け、09年7月から現職に。

川廷昌弘

博報堂DYメディアパートナーズ環境コミュニケーション・ディレクター。国際生物多様性年国内委員会「地球生きもの委員会」委員などを務める。

間違いだらけの生物多様性

森 「間違いだらけの生物多様性」という前に、そもそも生物多様性という言葉の認知度が低すぎます。「認知度5%」という調査結果も出ていました。なぜ認知度が低いのか、ひょっとしたら何か間違っていたのでしょうか。

て、むしろどんどんやって頂きたいのですが、それは決してメインにすべきことではない。そこが一番間違っている部分です。

をやってキャンペーンをしているのです。

です。ですから決して、オラウータンが絶滅の危機に瀕しているからオラウータンのために募金を集めましょうとか、商品を買うとその1%が寄付されますとか、そういうレベルの話ではない。その誤解から、きちんと直していかないとけない。

足立 生物多様性の専門家から世の中に対する伝え方がそもそも間違っていたのかもしれない（笑）。それは置いて、なにしろ言葉自体が伝わっていないし、生物多様性そのものがかなり誤解されています。

例えば、企業として何をすればいいかという時に「里山の保全活動をします」「絶滅が危惧される動植物の保全・保護をお手伝いします」となるケースがやはり圧倒的に多い。

は、まさに「企業がどんな原材料を使うか」とか「どこで操業するか」というテーマと非常に関わりがある、企業の本業そのものの問題です。事業が生物多様性に対してどういう影響を与えているかが問われている。

森 単なる種の保護だけではなく、企業の本業そのものが生物多様性と深い結びつきがある。時としては、企業リスクを招く要因になり得るということですね。

右から、足立直樹氏、栗野美佳子氏、川廷昌弘氏、森 撰（『オルタナ』編集長）

